



Data 2023-112

監督：セドリック・クラピッシュ
出演：マリオン・バルボー／ホフェ
ツシュ・シェクター／ドウ
ニ・ポダリデス／ミュリエ
ル・ロバン／ピオ・マルマイ
／フランソワ・シヴィル／ス
エラ・ヤクーブ／メディ・バ
キ

👁️👁️ みどころ

パリ・オペラ座で上演されるバレエを鑑賞するのは、ワーグナーのオペラを観るのと同じくらい至難のワザだが、本作では、冒頭の“セリフなしの15分間”でしっかり『ラ・バヤデール』を鑑賞することができるから、ラッキー！それはともかく、『スパニッシュ・アパートメント』（02年）で有名なフランス人監督セドリック・クラピッシュの“青春群像劇”は、とにかく明るく、前向きなところが素晴らしい。

バレエ界の頂点を目指しているエリーズが、公演中に足首を怪我すれば、26歳という年齢を考えても、バレリーナ人生は終わり！？そう考えたのは当然だが、ライバルだらけだったダーレン・アロノフスキー監督の『ブラック・スワン』（10年）と異なり、本作でエリーズの周りに集まる人々は善人ばかり。コンテンポラリー・ダンスへの転向は全くの偶然だが、周りがこんな善人ばかりなら、そんな形での“第2の人生のスタート”も可能！

ラストのコンテンポラリー・ダンスの公演を観れば、“1粒で2度おいしい”と実感できること間違いなし！

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■このフランス人監督に注目！長年の夢が本作で実現！■□■

フランス人監督のセドリック・クラピッシュといえば、『スパニッシュ・アパートメント』（02年）（『シネマ4』312頁）で有名だ。同作は、思わず自分の学生時代を思い出しながら“ヨーロッパの若者たちの青春群像劇”をたっぷり堪能できた作品だった。彼は同作のような青春の一時期をテーマにした作品がトレードマークだが、他方で、40年以上もダンスに興味を持っていたため、2010年に初めてドキュメント『オーレリ・デュボン 輝ける一瞬に』を監督し、以降、パリ・オペラ座に関する映画を多数発表しているらしい。

私もバレエ映画は大好きだから、『パリ・オペラ座のすべて』(09年)、『シネマ24』207頁)には圧倒されたが、同作はセドリック・クラピッシュ監督と同じフランス人のフレデリック・ワイズマン監督が84日間の密着取材で完成させた素晴らしい作品だった。同作はドキュメンタリー映画だったし、セドリック・クラピッシュ監督が、これまでたくさん作ってきたパリ・オペラ座に関する映画もすべてドキュメンタリー映画だったから、彼は20年以上ずっと、「いつか本当にダンスについてのフィクション映画を撮るべきだと思っていた」らしい。そんな長年の夢が、本作でついに実現！おめでとう。さあ、私たちもしっかり鑑賞したい。

■ダンスをする俳優VS演技をするダンサー。それに注目■

私はナタリー・ポートマンが主演した、ダーレン・アロノフスキー監督の『ブラック・スワン』(10年)、『シネマ26』22頁)が大好き。“ダークな物語と白鳥の湖の融合”という発想がユニークなら、“芸術のためには欲望の解禁が不可欠”という哲学(?)も“意味シシ”だった。また、同作を鑑賞した日の夜に私が怖くてイヤな夢を見たのは、きっと、“白鳥の湖のラストはこんな設定だった?”という疑問を含めて、同作の、夢か現実か混然一体となった怖いミステリーに私の頭が混乱していたためだから、同作の影響力は大きかった。

ところが、セドリック・クラピッシュ監督のインタビューの中で、彼は「私は『ブラック・スワン』に夢中になれなかったことを白状します。」と述べている。それは、つまり「スタントマンが登場するアクション映画のように、ほとんどのダンスシーンでナタリー・ポートマンがダンサーに置き換えられていたことがとても気になりました。」ということだ。それについて、彼は「私がダンスについての映画を作る時は、演じる人がダンスもすることが不可欠です。ダンスについて語りたいなら、ダンサーの肉体から始めなければなりません。映画のシーンを演じている人々は、リハーサルやダンスをする人でもなければいけません。」と語っている。なるほど、なるほど。

主人公のエリーズ役には“ダンスをする俳優”ではなく、“演技をするダンサー”を選びたかったというセドリック・クラピッシュ監督のキャスティングに見事に応え、本作でセザール賞の有望若手女優賞にノミネートされる好演をしたのはマリオン・バルボー。彼女はパリ・オペラ座バレエ団のダンサーで、階級はブルミエール・ダンスーズだそうだ。

しかして、「ダンスをする俳優」だった『ブラック・スワン』のナタリー・ポートマン VS 「演技をするダンサー」である、本作のマリオン・バルボーの対比に注目！

■バレエ(苦しみ) VS コンテンポラリー(楽しみ) ■

『ブラック・スワン』は、パリ・オペラ座の最高峰を目指すダンサーたちのライバル競争の物語をサスペンス色とミステリー色いっぱい描いた傑作だった。その反面、同作ではバレエ(の稽古)の厳しさ、苦しさやライバルに嫉妬心を燃やす人間のいやらしさ等もたっぷり表現されていた。しかし、『スパニッシュ・アパートメント』でセドリック・クラ

ピッシェ監督は、人間のそんなマイナス面には全く目を向けず、仲間、楽しみ、前向き、等々の肯定的な面だけを明るく描いていた。したがって、40年以上、パリ・オペラ座のバレエを鑑賞し、そのドキュメンタリー映画を作り、2010年以降は定期的に撮影を依頼されていたというセドリック・クラピッシェ監督にとって、ダンスをテーマにしたフィクション映画を作るについても、その方向性を貫くことは何よりも大切だったらしい。なるほど、なるほど。

私はバレエ（音楽）についてはそれなりに詳しいが、コンテンポラリー（現代舞踊）についてはほとんど知らない。しかし、セドリック・クラピッシェ監督は本作で、バレエ（＝苦しみ）VS コンテンポラリー（＝楽しみ）と対比させようと、左足首の怪我をしてしまったエリーズがバレエからコンテンポラリーに移行していく姿を描いていくので、バレエVS コンテンポラリーの対比にも注目！

■□■物語とダンスの時間配分は？その“黄金比”とは？■□■

ストーリー展開中に突然歌を歌い始めるミュージカル映画はヘン。そういう意見の映画ファンも多いが、私は『ウエスト・サイド物語』（61年）や『サウンド・オブ・ミュージック』（65年）をはじめとして、ミュージカル映画が大好き。ダンスをテーマにした『フラッシュダンス』（83年）や『コーラスライン』（85年）も大好きだ。

そんな私の興味を引いたセドリック・クラピッシェ監督インタビューは、彼が「私は脚本担当にちょっとしたリサーチを頼んでいたのです。『雨に唄えば』から『赤い靴』『キャバレー』、『ウエスト・サイド・ストーリー』を通して『ロシュフォールの恋人たち』まで、数十の有名なミュージカル映画におけるダンスと物語の時間の比率を計算してもらったのです。驚くべきことに、結果は常に同じで、ダンスと歌の時間は映画全体の25%から35%の間を占めました。つまり、物語部分は常に全体の長さの3分の2から4分の3の間にあったのです。信じられませんでした。しかし、映画全体の3分の2が物語部分を閉めるというこの考えは、本作について私のガイドとなりました。」と語っていることだ。

その黄金比を発見した彼は、いったんは物語を洗練させるために多くのシーンをカットしていたにもかかわらず、それを再編集し、“黄金比”になるように調整したらしい。なるほど、なるほど。

■□■冒頭 15 分間の、セリフなしのバレエの舞台に注目！■□■

私の中3か高1の時に観た『アラビアのロレンス』（62年）では、冒頭、バイクに乗ったロレンスが猛スピードで疾走する姿が映し出される中、障害物を避けきれずに道路からはみ出して死亡してしまうシーンが登場した。もちろん、これは第2次世界大戦が終結し、軍人を引退してしまったロレンスの姿だが、そのロレンス最期の姿と、青年将校ロレンスの活躍の場が広がっていく本番のストーリーとが素晴らしい対比を成していた。

それと同じように（？）、本作の冒頭は、パリ・オペラ座における『ラ・バヤデー』の公演風景から始まる。残念ながら、私はこの『ラ・バヤデー』を知らなかったから、冒

頭のシーンがどの場面なのかまではわからなかったが、主役を務めていたエリーズが出番の合間に舞台裏に下がった時、恋人で共演者のジュリアンが、ダンサーのブランシュとキスしている姿を目撃したから、ビックリ！

主役の間は長くないから、エリーズはとりあえず、心の乱れと足の震えを抑えながら踊り続けたが、大きくジャンプした後の着地の時に転倒してしまったから、さあ大変！本作のパンフレットによると、現実にもこんな事故はあり、その場合は常に準備している“代役”が代わりを務めるらしい。したがって、エリーズの事故後も舞台は滞りなく続いたようだが、すべての観客がそんな歴史的な瞬間を目撃する本作のようなシーンは珍しいだろう。

しかして、本作はここまで15分間、全くセリフなしで進行していくから、ビックリ！本作最初のセリフは、この事故を目撃したすべての観客からの「ああ！」というものになる。したがって、本作では私も固唾を呑みながら見守った、この冒頭の、セリフなしの15分間に注目！大阪のフェスティバルホールで上演されるバレエのチケットを購入するのは簡単だが、パリ・オペラ座で上演されるバレエを鑑賞するのは、ワーグナーのオペラを観るのと同じくらい至難のワザ。したがって、それを本作冒頭の15分間でしっかり鑑賞できたことに感謝！

■□■怪我とショックの程度は？治療方針は？回復見込みは？■□■

冒頭15分間の“沈黙のシーン”が終了した後の観客の注目点は、エリーズの怪我とショックの程度は？その治療方針は？回復見込みは？ということになる。さて、病院に救急搬入され、応急処置を受けたエリーズの左足首の怪我の程度は？それは捻挫？それとも骨折？もし骨折なら、治療に数ヶ月はかかるから、舞台への復帰は1年後・・・？

ちなみに、2023年のシーズンを二刀流で大活躍していたエンゼルスの大谷翔平について、8月23日に右肘靭帯の損傷が発表されたのは大ショック。しかし、大谷は9月19日に右肘の靭帯を修復する手術を受け、成功したらしい。その結果、手術を行った医師によると、2024年のシーズンは打者1本で、2025年のシーズンは投打の二刀流で開幕から復帰できる見通しだから、期待感が高まっている。

しかし、エリーズの怪我は足首の剥離骨折で、治療やリハビリによっては完治しない可能性もあると宣告されたから、大ショック。なぜなら、それは、現在26歳の彼女にとっては、バレリーナ人生の終わりを宣告されたことになってしまうからだ。そんな失意のエリーズを今、慰めながら足の治療に当たっている男は、理学療法士のヤン（フランソワ・シヴィル）だ。いつもと様子が違うヤンに「何か変だよ」と声をかけると、ヤンはブランシュと「2年前から付き合っていた」と打ち明けたから、エリーズはビックリ！『ラ・バヤデール』上演の真っ最中に舞台裏で、エリーズの恋人であるジュリアンとキスを交わっていたダンサーのブランシュがヤンの恋人だったということは、“二重の三角関係”になっていたということになる。そこで面白いのは、本来、足の怪我と精神面で落ち込んでいるエ

リーズを慰めるべき立場のヤンが、ブランシュの浮気を知って泣き出すと、逆にエリーズがヤンを慰める立場に回ることに。これを見ていると、エリーズがいかに性格のいい女かということがよくわかる。したがって、ブランシュに振られたヤンがエリーズの治療を続けているうち、次第にエリーズに好意を持ち始めたことは確実だが・・・。

その成り行きはともかく、そんなエリーズの、第2の人生の模索は・・・？

■□■さすがフランス！この人もあの人も、いい人ばかり！■□■

思いもかけなかった大怪我にショックを受け、第2の人生を模索するエリーズが最初に相談したのは、実家にいる父親のアンリ（ドゥニ・ポダリデス）。6歳の時にエリーズがバレエを始めたのは母親の影響を受けたためだが、12歳の時に母親が亡くなった後も、母の想いを胸にレッスンを続けてきた。しかし、父親は弁護士としては有能だったが、そんな娘の気持ちは全く理解できていなかったらしい。本作では、そのチグハグぶりが面白い。

第2の相談相手は、18歳の時にバレエをやめたサブリーナ（スエラ・ヤクープ）だ。エリーズとサブリーナの会話は小気味よいほど呼吸がピッタリ合っているうえ、サブリーナの恋人で出張料理人のロイック（ピオ・マルマイ）のアシスタントのバイトを引き受けたことが、エリーズの人生の転機になることに。さらに、3人で訪れたブルターニュの瀟洒なレジデンスは、芸術を愛するオーナーのジョジアーヌ（ミュリエル・ロバン）がアーティストに練習場を提供している宿泊施設だが、そこにコンテンポラリー・ダンスの著名な振付師であるホフェッシュ・シェクター（ホフェッシュ・シェクター）がカンパニーを引き連れて泊まりに来たことによって、エリーズの第2の人生が大きく開けていくことに。

本作中盤のそんなストーリーを見ていると、『ブラック・スワン』とは正反対に、登場人物は、この人もあの人も、いい人ばかり。さすが、文明国フランス！と感心しながら、素晴らしい人間関係の続出に、少しずつ私の心も洗われる気分になっていくことに・・・。

■□■“1粒で2度おいしい”を本作で堪能！■□■

2023年の日本のプロ野球セ・リーグは、阪神タイガースが早々と優勝を決めた。恒例(?)の、道頓堀へのダイビングは、事前規制のおかげで大問題にはならなかったが、その度にTVのニュースに登場するのが道頓堀にある「グリコサイン」だ。これは、2014年10月23日に6代目としてリニューアルされたものだが、今や大阪の「風景」として馴染み深い。この屋外広告物がはじめて設置されたのは1935年というから驚きだ。

他方、あなたは「大きいことはいいことだ」と「1粒で2度おいしい」のキャッチコピーを知ってる？「大きいことはいいことだ」は、高度経済成長期の真っ只中で、「重厚長大」への経済発展を推し進めていくパワーと楽しさの象徴のような、一世を風靡した、森永エールチョコレートのキャッチコピーだ。ひげの指揮者として有名だった音楽家、山本直純氏が、気球に乗って地上に集まった群衆に向かって、CMソングの指揮を執るというこのコマーシャルを私は今でもハッキリ覚えている。「大きいことはいいことだ」は、バブル崩

壊とともに廃れてしまったが、もう1つのアーモンドグリコの「1粒で2度おいしい」は、今なお有名だ。もっとも、その本来の意味は「アーモンドの歯ごたえとキャラメルとうまさが同時に味わえる」ということだったが、現在では「とある一つの物事から、二つまたはそれ以上の利益を同時に享受する様子」を意味する慣用語として定着しているから、面白い。

しかして、私はなぜ、ここにそんなことを書いているの？それは、本作は冒頭に見る15分間の圧巻のバレエシーンだけではなく、ラストではエリーズも参加するシエクターのチームによるコンテンポラリー・ダンスの舞台初日のシーンを見ることができるからだ。冒頭のバレエのシーンには父親の姿はなかったが、ラストのコンテンポラリー・ダンスのシーンでは観客席に父親とエリーズの2人の妹の姿があった。さらに、ジョジョアヌやヤンの姿も！まさに、このステージと共にエリーズの第2の人生が幕を開けていくわけだ。

2023（令和5）年9月28日記